

第2群の座長をつとめて

柿 崎 妙 子

(国立金沢病院)

第6席「患者が選択する洗髪体位」(桑本敏子さん)は日常よく行われている基本的看護援助の1つである洗髪に視点を当て、身体的負担を最小限に押さえながら、最大の効果が得られる洗髪を行うことの必要性から、患者が選ぶ洗髪体位と身体的負担の関係を、明らかにした報告である。

後屈位洗髪と前屈位洗髪の間には身体的負担において差は見られず、また年齢や性別においても同様の結果であった。

今後は研究の中で分析したように、洗髪時頭を支えるため両体位においてどのような工夫が必要なのか、また、頭皮の汚れやかゆみについても差がなかなどの観察や聞き取り調査を行うことにより、患者の望む体位でしかも安楽で効果的な洗髪を行うことができる考える。

第7席「意識障害患者に対する経口援助の現状」(西谷優子さん)は、意識障害患者にとって口から食べることが患者の意識状態の改善につながる重要な行為であるとして、認識し実践している。今回その看護実践の中で看護婦は、どのような視点で援助したか、援助と評価内容、さらに次の援助場面にどのように活用されたかを看護記録から振り返り現状を明らかにした報告である。

看護記録から明らかになったことは、経口摂取確立に向けて、次の援助へつながるような評価が少なかったとしている。

その人らしさを表出させ、意識のレベルアップを効果的にするために、食べる行為に対してさらなる看護のこだわりを持ち続けることが、看護計画の立案、評価につながり、今後活かされてくると思われる。

第8席「脳梗塞の再発作を繰り返し長期臥床生活となっていた患者への経口摂取についての一検討」(洲崎嘉子さん)は、食中枢が障害されていない本事例において、日常生活援助場面における細やかな観察から、患者の食に対する関心を見出し、科学的根拠を基に理学療法士とともに訓練計画、分析、評価しながらその人の経口摂取の目標に近づけた報告である。

M氏に人間的な関心を注ぐことが、看護援助の原点になっており、患者の特性を考えた直接、間接の嚥下訓練につながっている。

また家族とのかかわりも重要と考えられ、看護婦とともに目標達成のためどの部分をサポートするかなども課題であると思われる。

第9席「夫を亡くした家族への援助を考える」(森谷玲子さん)は、終末期患者の看護の中で、家族への悲嘆のケアとして、患者死亡後の家族に対して看護者のあり方を見つめた報告である。死亡後7日目、14日目、そして49日目という社会生活の一区切りに合わせて面談し、正常な悲嘆のプロセスをたどっているか分析している。悲嘆過程の表出の仕方や家族背景の違いはあるが、患者のみでなく家族をも含めたケアの重要性を患者死亡後の家族の面談を通して明らかにした事例であったと思う。

大切な人の死は最もつらい喪失の一つであり、正常な悲嘆に満足のいく解決がもたらされるには、1～3年の年月がかかると言われる。それゆえ、家族へのケアの必要性を考える時、自主的な面談方式や他職種の協力、社会援助資源の活用等による対応が望まれ、今後の課題であると思われる。